



旅から見えてきた

日本人

の「いま」と「未来」

## 椎名 誠

(作家)

### ●しいな・まこと

1944年東京都生まれ。1976年に沢野ひとし、木村晋介、目黒考二氏らと「本の雑誌」創刊。1979年より作家活動に入り、以後、小説、紀行文、随筆、写真集など、幅広く作品を手がける。『犬の系譜』で吉川英治文学新人賞、『アド・バード』で日本 SF 大賞受賞。近著に『ぼくがいま、死について思うこと』『あやしい探検隊 済州島乱入』などがある。

## 関野吉晴

(探検家・医師、武蔵野美術大学教授)

### ●せきの・よしはる

1949年東京都生まれ。一橋大学法学部、横浜市立大学医学部卒業。1993年から10年をかけ、アフリカに誕生した人類が南米最南端まで辿り着いた旅路「グレートジャーニー」を踏破した。2004年から「新グレートジャーニー 日本列島にやってきた人々」を始め、2011年6月に「海のグレートジャーニー」を終えて日本に到達した。



世界を旅する作家、椎名誠さんに、大震災を経た日本の姿は、どう見えているのだろうか？ 旅の体験がもたらす「未来」や「死」への思いとは？ 国立科学博物館での「グレートジャーニー展」を機に関野吉晴氏が各界の賢人たちと人類の未来を語り合ってきたシリーズの特別版！

## 海のグレートジャーニーと漂流記

**関野** 私は四十年以上旅を続けて、アマゾンのジャングルやモンゴルの草原で、あるいはインドネシアの島々で、自然と寄り添うように生きる人たちと交流を重ねてきました。彼らとの出会いが、自然と人間との関わりについて、また経済成長を優先させる日本の社会について、見詰め直すきっかけになりました。

旅をして異文化に身を置くと、目から鱗が落ちるような瞬間というか、自分では当たり前と思いついて多くのことが当たり前ではないと気づく出来事があります。振り返ると、そんな積み重ねが、旅を続ける原動力になった気がします。

椎名さんにも、多くの国々を旅して見えてきたもの

や気づいたことが多々あると思いますが、そうした体験を通して、日本人や日本の社会がどう見えるのか、今日はそこまでのことを語り合ってみたいと思います。そういえば、椎名さんとはこれまでも何度か、こうして話す機会がありました。が、「初めての旅」の話を聞いたことはありませんでした。初めての旅はいつですか。

**椎名** 初めての旅ですか？ うーん、あれは五歳だったかな（笑）。ある日、家の前の道を進んでいっただうなるんだらうと思って、ずっと先まで歩いていきました。日が暮れて帰れなくなって泣いていたらお豆腐屋さんに助けられた。四十分間にわたる波乱に富んだ旅でした（笑）。

**関野** そんな幼少期の体験がきっかけになって、六十年以上、旅を続けてきたわけですね（笑）。

**椎名** そうですね。もう少しきちんと語ると、ぼくが旅に憧れたのは、子供のころに読んだ本の影響が大きかったと思います。

たとえば、ジュール・ヴェルヌの小説『十五少年漂流記』や、砂漠を移動する幻の湖・ロプノールを探するために中央アジアを探検したスウェン・ヘデインの